

Title	前田流平曲古譜本における白声の存在について
Author(s)	奥村, 和子
Editor(s)	
Citation	女子大文学. 国文篇 . 1999, 50, p.55-64
Issue Date	1999-03-30
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10466/11094">http://hdl.handle.net/10466/11094</a>
Rights	

# 前田流平曲古譜本における白声の存在について

奥村和子

国語史、とりわけアクセント史の分野において平曲譜本の文献が多大であることは言うまでもない。中でも平家正節は平曲譜本の集大成として、その価値を高く評価されている。そしてその平家正節と同じ系統にある、いわゆる京都前田流の譜本「横井也有自筆本平語（以下『也有本』）」「愛知県立大学本（以下『愛知本』）」等は、正節に至るまでのアクセント等の史的变化を比較的内容に考察できる資料であり、江戸前田流等、他の

諸譜本が口説という曲節において線条式ハカセ（「／」「＼」等）を主とするのに対し、これら京都前田流譜本は専ら文字式ハカセ（「上」「中」等）を用いるという特徴を持つ。「筑波大学蔵平曲譜本（以下『筑波本』）」と称する。なお、引用文等で『東教本』とあるのは筑波大学の旧称「東京教育大学」本の略称であり、同じ本を指す）は、「未だ一方流が波多野・前田流に分岐しない前の」（注一）成立との指摘もある古譜本だが、その文字式ハ

カセ等からして京都前田流のごく古いものである可能性が高い。これらの譜本のうち平家正節や愛知本には白声（素声とも）という曲節が存するのに対し、筑波本や也有本にその標示が無いことから、京都前田流では「白声の確立が遅れた」こともその特徴の一つとされている。即ち白声のないことは筑波本・也有本の示す古色と考えられるわけである（注二）。

さて「東北大学蔵平曲譜本（以下『東北本』）」は、古譜本とされる筑波本に詞章譜記その他が似ており、かつ、筑波本よりも譜記の記される範囲が広く（筑波本の譜記が巻一に限られるのに対し、東北本は巻二全体にまで譜記が付される）、質量ともに筑波本を補うことのできる資料として注目される。筑波本については也有本との類似性がすでに指摘されているが、それでもこの二本においては、譜記の種類用法や、譜記の付けられた

箇所等の面で相違点を容易に指摘できる。これに対して筑波本と東北本は、精査を行なわねば相違点が見出せないほどに譜記が酷似しているのである。

例えば、巻一「額打論」において、筑波本の口説（詢と表記される場合もある）標示部分の譜記を比較してみると、以下のようになる。なお、平家正節（以下『正節』。本稿では尾崎家本を資料として使用した）では口説部分の譜記として、他の三本共通に用いられる「上」「中」ではなく「上」「コ上（以下「コ」）」が用いられているため、参考として比較結果を示す。三本の「中」と正節の「コ」の用法は似ており、同じものとして扱うと一致率も高くなるが、三本における「中」が一定の条件下で低拍を表すこともあるのに対して正節の「コ」は高拍しか表さなという歴然とした用法差がある。

①筑波本において譜記の付されている箇所 70箇所

例：「夏の」（筑）上××、「いつしか」（筑）中上中×…等

②右記①と東北本の譜記の一致しない箇所 2箇所

例：「まいらつさせ」（筑）××中上中×（東）××中×

上中、「其夜」（筑）上上×（東）上中×

③右記①と也有本の譜記の一致しない箇所 23箇所（①で無

譜記だった箇所1箇所を含む）

例：「二歳」（筑）上中×（也）上上×、「受禪」（筑）上中上（也）××上、「比（コロ）より」（筑）××××（也）中×××…等

④（参考）右記①と正節の譜記の一致しない箇所 59箇所（①で無譜記だった箇所1箇所を含む）。ただし「中」＝「コ」と考えると一致しない箇所は31箇所になる。

例：「御不預の」（筑）×中中（正）上上上コ、「俄に」（筑）×中××（正）×上××、「二京の」（筑）××××（正）コ×××、「依て」（筑）中中×（正）上コ×…等

これらの結果から、分母を①（70）に③④で也有本・正節に譜記の付いていた2箇所をプラスした72としてそれぞれの譜本の筑波本との一致率を計算すると、

東北本 70/72・・・約97%

也有本 49/72・・・約68%

（参考）正節 13/72・・・約18%

（「コ」を「中」と同じものと考えると41/72で約57%）となる。筑波本と東北本の譜記の類似の著しさは明らかであろう。一致しない用例2例を見ても、1例は「参らつさせ」の四拍めのツの表記が小さいために、譜記がズレた可能性があり、またもう1例にしても、譜記は異なるが、そこに反映すると考

えられるアクセント型(●●○)は同じであつて、③④に見られるような異なるアクセント型を示す用例ではないのである。

譜記のない章段のずれ(たとえば「殿上闇討」「清水炎上」等は筑波本に譜記があるが東北本にはなく、「内裏炎上」「御輿振」等は逆に筑波本に譜記がないが東北本にはある)等からして、直接の書写関係にはないと思われる二本だが、祖本を同じくする程度の親しさは考え得るであらう。

さて、斯様に酷似している筑波本と東北本だが、精査を試みると当然いくつかの相違点が浮かび上がってくる。以下に、卷一における筑波本と東北本の相違点を、譜記の面を中心にいくつか挙げておく(注三)。用例は、特に注記のない限り筑波本の口説標示部分のものである。

① 譜記に反映するアクセント型の異なるもの—東北本に古い、もしくは正確なアクセント型の表れている場合が多い。

「何れ」(筑) ××中(東) ×中上、「女」(筑) 上中／(東) 上中×、「先に」(筑) 上中×(東) 上××、「物は」(筑) コ／(東) コ／(折声)、「幽か」(筑) 中上中(東) 中上×；等

② 譜記の形態は異なるが、反映するアクセント型は同じであるもの—数的に目立つのは次のa、cのパターンである。

前田流平曲古譜本における白声の存在について

a 筑波本では文字式、東北本では文字式線条式併用

「夢」(筑) 中×(東) 中×・／  
上×(東) 中上×・／  
上中×・／×；等

b 筑波本では線条式、東北本では文字式線条式併用

「天武」(筑) 中×／(東) 中上×(拾)、「間」(筑) 中×／(東) 中上×(怒下)、「興福寺」(筑) 中×／×××(東) 中上××××(怒下)ゲ

c 筑波本では文字式、東北本では線条式

「常は」(筑) ××中×(東) 中×／×、「内」(筑) 上×(東) 中×／×(おのの)「筑」上上×(東) 中上×／×；等

いずれも用例がそれほど多くなく、筑波本と東北本の前後関係を言うことは困難であるが、ここに示したアクセント型の対比や線条式ハカセの多さ(文字式ハカセは線条式ハカセより新しいものと考えられる)等、東北本にやや古い側面が見られるようである。

このように東北本は、ある大きな一つの相違点を除いて筑波本に酷似する譜本であり、アクセント面等からすると筑波本よりやや古いものである可能性もある。而して、その大きな相違

点とは東北本における白声の存在であつて、京都前田流譜本の古いものの特徴の一つとして白声の無いことが挙げられていることは前述した通りである。すなわち白声の有無が大きな問題点となつて、東北本の筑波本に対する先行性はむしろ、この二本に比べて関係性の薄い也有本との前後関係すら疑わねばならないことになる。

ところで、従来「白声がない(故に古い)」とされている筑波本を詳細に見ると、所々に一見意味のなさそうな点が付されていることに気付く。筑波本における曲節は、詞章の途中に曲節記入ための空間をとつて書き込まれるのではなく、詞章の横に書き入れられている。そのため、もっぱら大きな黒丸(●)でその曲節の始まる箇所を詞章の右肩に示しているのだが(注四)、時折、詞章の右肩にある「●詢」という書き入れの他に、同じ文字の左肩にやや小さい点(・)の付けられていることがある。これを考慮しながら、筑波本の詢部分を東北本と対照させてみると、以下のようなのである。

「殿上蘭討」 筑波本 東北本  
 然ルヲ忠盛未ダ 詢(冒頭) 口説  
 兼テ用意ヲ致ス ●詢 口説

又忠盛ノ郎等 ●詢 口説素声  
 ウツヲ柱ヨリ ●詢 愛ヲ口説素声ニモ  
 エコソ出マジ ●詢 口説  
 忠盛何トスベキ ●詢 口説  
 又花山院ノ ●詢 口説素声  
 案ノ如ク五節 ●詢 口説  
 若咎有ベクハ ●詢 口説  
 「我身栄花」  
 昔奈良御門ノ ●詢 詢  
 其外御女八人 ●詢 詢素声  
 一人ハ六條 ●詢 詢素声ニスル也  
 「二代后」  
 昔ヨリ今ニ至ル 詢(冒頭) 口説  
 去共鳥羽院御晏駕 ●詢 口説素  
 前ノキサイノ官 ●詢 詢  
 然共我朝ニハ ●詢 口説  
 父ノ大臣コシラヘ ●詢 詢色  
 既ニ御入内ノ日 ●詢 口説素  
 故院ノ未ダ幼主 ●詢 口説  
 すなわち、東北本の「口説」「詢」に対応する箇所には右肩の

「●詢」「詢」のみが記されているが、東北本で「口説素声ニモ」の如く口説と白声を併記する部分には筑波本では必ず「●詢」に加えて左肩に「・」が見られる。ここでは巻一初めの三章（祇園精舎）については、筑波本に曲節記入がないため除いた）について載せたが、この対応関係は、筑波本東北本両方に曲節の記入されているすべての詞章において成りたつ。

更に、続く「額打論」においては筑波本の

御葬送ノ夜

という詞章の「御」の文字に

●詢

・ノトキハ三重マテ

と記されているのだが、ここを東北本で見ると、

詢

素声ノトキハ三重マテ也

となっている。筑波本における「●詢」の左の「・」は素声を表すと考えてまず間違いないであろう。文字で表記していなかっただけで、筑波本にも白声の存在は皆無ではなかったことになる。

また、筑波本・東北本の「詢素声」の詞章の左側には、その曲節の終わり近くに「ムン」という表記の見られることがある。

前田流平曲古譜本における白声の存在について

「殿上闇討」

(筑)「右●●詢」「左…」又忠盛ノ郎等(中略)小庭ニ

「右…怒下ケ」畏ツテゾ「左…ムン」候ヒケル「左…爰斗

サケニ」貫主以下(以下略)

(正)「右…白声」「左…口説ニモ」又忠盛の郎等(中略)小庭

に「左…コワリ下ケ」かしこまつてぞ「右…ハツミ」候

らひける「右…中下ケ」貫主以下(以下略)

「清水炎上」

(筑)「●詢・」去程ニ其年モ(中略)昭穆ニ「ムン」不相叶

(正)「素声」去程に其年モ(中略)昭穆ニ「ハツミ」相叶はず

「妓王」

(筑)「●詢・」角テ三年ト申ニ(中略)西八條殿ヘゾ「ムン」

参ジタル

(東)「口説素」角テ三年ト申ニ(中略)西八條殿ヘそ「ムン」

参ジタル「クトキ」

(正)「素声」斯て三年と申に(中略)西八條殿ヘそ「ハツミ」

さんしたる「口説」

このような正節との対照からして、「ムン」は正節で「白声」の終わりに現われる「ハツミ」の役割を果たすものだと思うられる。特に「殿上闇討」の例などは、左右の書き入れが逆にこそ

なっているものの、二本のつながりを思わせる例として注目される。しかし、この「ムン」が何を意味する言葉かは今のところ不明であり、そもそも文字として「ム」が「△」に見える例、それがつぶれて黒い点に見える例、「ン」が「也」に見える例等もあり、検討を要する。

さて、筑波本の白声について思い出されるのは、「おそらく東教大本においても、現実の語りには白声を有したはずであり、しかもその白声を表記しないのは、前田流において、白声にも口説と同種の墨譜（アクセントを示す『上』や『コ』『中』もしくはそれらに相当する各譜本の当該墨譜）を付したことから、表記の上では『詢』と一括して記したのではないだろうか」との説（注五）である。その根拠として挙げられた例にはやや問題があるが、筑波本において白声が表記されなかった理由として納得のいく説明であろう。ただしここで明らかにしたのは、いずれも「口説・素声ニモ」といった、どちらに語ることもあるという曲節の存在であって、筑波本に独立した白声があったということではない。そこには、「平家指南抄」（元禄八年）の「口説ヲ白声ニカタリ、白声ヲ口説ニモカタル也」（注六）という記述もかかわってくる。初期の白声は、その場所が確立しない、或程度揺れの存するものであったと言われる所以であり、

東北・筑波両本における「口説・素声ニモ」の多さはこれを体現したのと言える。

なお、東北本巻二には口説と併記されない独立した白声が3箇所現われる。いずれも以下の如く正節で白声の始まる箇所と重なっており、白声で語る部分として安定していたものと思われる。

#### 「小教訓」

（東）「素声」何事にて候やらん

（正）「素声」何事にて候やらん

#### 「卒都婆流」

（東）「白声」三所権現ノ内

（正）「白声」三所権現の内

#### 「卒都婆流」

（東）「白声」弥尊ク覚エテ（中略）コソ「ムン」見ヘタリ

ケレ「口説」此僧

（正）「素声」いよいよ尊く覚へて（中略）こそ「ハツミ」

見ヘタリけれ「口説」此僧

筑波本の巻二には曲節や譜記が記入されていないため、筑波本における白声の「確立」は確認できない。東北本と筑波本との酷似は前述した通りだが、東北本はその詞章・譜記ともに全編

同筆とは言い難いのである。ハカセの種類や用法等は一貫しており、同じ本の書写であるとは思われるが、断言はできない。

また、白声が詢とまったく「同種の墨譜」のみであったかという点についても問題は残る。東北本の場合、口説・白声併記部分には文字式ハカセの他、詞章の左に線条式ハカセが付されており、そのあと口説のみの箇所に移行すると線条式ハカセは現われない、という傾向が見られる。「・」（白声）が「●」（口説）よりも左に記され、線条式ハカセは常に詞章の左側に付されていることを考え合わせると、線条式ハカセが白声の墨譜である可能性が高くなる。ただ、線条式ハカセと文字式ハカセとは形が異なるだけでその反映するアクセント型は同じである場合が多い。異なるアクセント型を示すものとしては、たとえば次のようなものがあるが、他の曲節に比して新しいアクセントを反映するとされる正節の白声譜記とは異なり、

「返事」(字) 中中×(線) </> ×  
「ばかり」(字) 上中×(線) </> ×

「我身」(字) ××中(線) </> ×  
「如何様」(字) ××中上(線) </> </>

前田流平曲古譜本における白声の存在について

のように線条式の方が古いアクセントを示すと考えられるものも存する。筑波本は白声標示が無いため、続けて口説に移行する場合もその標示は無いが、ほぼ東北本に準じる。

このように見てくると、白声の存在故に東北本を筑波本より後のものと考えする必要はなくなる。むしろ、白声表記を省略しなかった東北本の方が古態を示すと言いうこともできる。その一方で、白声を有しない（白声標示が後筆と思われる）也有本と筑波本・東北本の前後関係が問題となるが、也有本には譜記の用法やアクセント面で「正節よりは古いが筑波・東北本よりも新しい」傾向が顕著である（注七）。也有本に後筆以外の白声標示が存しないのも、筑波本の如き白声を表記しない本の影響を受けたものではないかと思われる。也有本については、解題に渥美かをる氏による精査があるが、その京都前田流における位置付けについてはなお検討が必要かもしれない。

右の考察から、一応、京都前田流の東北本—筑波本—也有本—正節という流れを想定し、これをふまえた上でのアクセント調査例を次に示す。

「池」「馬」等、いわゆる二拍名詞三類は、中世期に「○○→



●○」の変化を起こして「石」「川」等の二類名詞と合流したが、格助詞「ノ」の下接する場合のみ、かなり後になるまで二類と三類の区別が保たれていたらしい。平曲譜本では「二類語＋『ノ』」形は●○▽型をとるが、「三類語＋『ノ』」形は●●▽あるいは●●▼型になるのである(注八)。この「三類語＋『ノ』」形について、四本で比較調査を行なった結果は以下のようなのである。

	東北本	筑波本	也有本	正節	
家の為	●●▼	●●▼	●●▼	●●▼	(87a 素)
親の命	●●▼	●●▼	●●▼	●●▼	(815 d 素)
親の命	●●▼	●●▼	●●▼	●●▼	(818 b □)
事の子細	●●▼	●●▼	●●▼	●●▼	(864 b 素)
事の数	●●▼	●●▼	●●▼	●●▼	(302 a □)
院の御所	●●▼	●●▼	●●▼	●●▼	(859 a □)
岸の下	●●▼	●●▼	●●▼	●●▼	(885 a 素)
雲の上人	●●▼	●●▼	●●▼	●●▼	(88 d □)
一の宮	●●▼	●●▼	●●▼	●●▼	(297 d 素)
門の内	●●▼	●●▼	●●▼	●●▼	(861 b □)
門の内	●●▼	●●▼	●●▼	●●▼	(563 a □)
門の内	●●▼	●●▼	●●▼	●●▼	(300 b 強下)

院の近習	●●▼	●●▼	●●▼	●●▼	(217 a 素)
縁の上	●●▼	●●▼	●●▼	●●▼	(861 c □)
縁の際	●●▼	●●▼	●●▼	●●▼	(863 a □)
家の子	●●▼	●●▼	●●▼	●●▼	(27 d □)
家の子	●●▼	●●▼	●●▼	●●▼	(856 a □)
一の宮	●●▼	●●▼	●●▼	●●▼	(160 c □)
言の葉	●●▼	●●▼	●●▼	●●▼	(32 c 素)

正節で●●▼型になっている語について、東北・筑波・也有本では「和語は●●▼型、漢語は●●○▼型」という傾向が見られ、注目される。この形のアクセントは「○○○▼↓●●▼↓●●▼」という変化を起こしたと考えられるわけだが、三本におけるこの過渡期的状態は、漢語の下接語との一語化が和語に遅れたことを表すものと言えよう。

以上、筑波本における白声の存在から、東北本の先行性を含めた京都前田流諸譜本の系統について考察した。その結果、東北本―筑波本―也有本―正節という流れを想定したわけだが、このことはまた、京都前田流において白声が行なわれた時期が必ずしも遅れたわけではない可能性を示唆することになる。また、アクセント面で正節よりやや古態を示すものとして貴重

な筑波本を量的に補い得る東北本の存在は、正節に至るまでの細かいアクセントの動きを知るに有効である。本稿では「二拍三類名詞十格助詞『ノ』」形についての調査でその一端を示したが、その他にもこれらの比較で明らかにできる変化があるかと思う。

注一 渥美かをる氏『平家物語講座』第一卷

注二 渥美かをる氏『横井也有自筆「平語」解題』（昭和52年

角川書店）、奥村三雄氏『平曲譜本の研究』（昭和56年 桜楓社）等

注三 詞章の面では、東北本に

「二代后」

\*主上上皇父子ノ御間ニ何事ノ御隔カ有ヘキナレトモ思  
ノ外ノ事共多カリケリ。（中略）故也。主上常ハ院ノ：

一本ニ此ヨリ下三十四字ヲヌキテ下ノ主上常ハノ上

ニウツス モアリアシ、

「妓王」

\*御返事

御ノ字一本ニナシ

等とあり、複数の本を参考にしていたことがうかがえるが、

前田流平曲古譜本における白声の存在について

「一本」を「アシシ」と評価しているためか、ほぼ筑波本と同文である。細かく見ると以下のような異同があるが、他本との関係を考えるときかなり少ない上、書き込み等からむしろ筑波本と東北本の親しさを証明するような例も存する。

事ナリ（筑・也・正）事カナ（東。但し、「カナ」の横に

「ナリ」も併記）

除目ト申スモ（筑）除目ト申スハ（東・也・正）

聞テイカニヤ（筑）聞ニ悲シフテイカニヤ（東・也・正）

慰メヨ（筑）慰メヨカシ（東・也・正。但し、東は「カシ」

部分に傍点）

出ニケリ妓王ウシト（筑）罷出ウシト（東・也・正。但し、

東は「罷出」と「ウシ」の間に「出ニケリ妓王」の書き

入れあり）

思知レテ（筑）思ヒヤラレテ（東）思シラレテ（也・正）

サラバ（筑・也・正）キクハ（東。但し、「キク」を消して

「サラ」の書き入れあり）

去程ニ山門（筑・也・正）去程平山門（東。但し、「平」を

消して「ニ」の書き入れあり）

なお、「東」は東北本、「筑」は筑波本、「也」は也有本、「正」は正節の略号である。本文中の略号も同様。

注四 この曲節記入については、たとえ「サゲ」は印なし、もしくはごくごく小さい点に添えて書き入れられていることから、他の曲節よりもやや独立性の弱い曲節であつたろうこと、また、「三重」のみ▲印になっていることから、一句の華とも言われた三重の特殊性等も読み取れそうである。

注五 山下宏明氏「平曲研究の基礎的一課題」(昭和55年『平家正節の研究』大学堂書店)

…東教大本の「詢」の付しようを見ると、例えば「妓王」にて、

京中ノ白拍子共妓王ガ幸ノ目出度：

に「詢」を付しながら、これに直接続く、

角テ三年ト申二都二…

にも重ねて「詢」を付す。『正節』にあつて、初重を重ねる「重初重」の例はあるが、口説を重ねる例は皆無で、東教大本の「詢」の重出は異様である。ちなみにこの「妓王」の場合、前者は、『正節』が口説、昭和本が白声、後者は、『正節』が白声、昭和本はひき続き白声を続ける。おそらく東教大本においても、現実の語りには白声を有したはずであり…

とあるが、今、この部分を東教大本(すなわち筑波本)で確認すると、前者と後者との間には

只先世ノ生付ニテコソ

という部分に「サゲ」があり、「詢」に直接「詢」が続いているわけではない。

注六 熱田呻吟著「平家物語指南抄」『増補国語国文学研究史大成9平家物語』所収

注七 拙稿「前田流平曲の史的変遷——国語史資料としての観点から——」(『語文研究』第七十一号)等参照

注八 金田一春彦氏『日本語音韻の研究』(昭和42年東京堂出版)、奥村三雄氏『平曲譜本の研究』等

(おくむら かずこ・本学講師)